

北欧で

2010年11月 渥美 裕子（あつみ みちこ）

初めて北欧で仕事を始めたのはフィンランドのヘルシンキ大学でした。日本学術振興会とアカデミーフィンランドのご支援によるものでした。量子化学で、私の中では、世界で一番だと思うヘルシンキ大学の Pyykkö グループの一員として研究ができることにとてもわくわくしていました。とうとう私の夢が叶った！ 私はここで一体何が出来るだろうか？ そして何が学べるのだろうか？ そう思い、東京からヘルシンキ行きの飛行機の中でこれからのことを考えていました。ヘルシンキ大学で仕事を始めるときに Professor Pekka Pyykkö が「きみが初めて北欧で研究を始めた記念に」とおっしゃって1冊のラボラトリノートブック（研究記録を録るノート）をくださいました。私は自分がもう学生でもなくて、研究者としてお給料をもらって仕事を始めたのだとそのノートブックから感じました。

研究というのは、それぞれの分野で一番の人がいます。世界的に有名な先生方というのは、私が知っている欧州の中では、人格者が多く、いつも学生や若手研究者を育てあげながらリードしていくように思えます。最初に Pyykkö 先生は「いつでも何でも聞いていいですよ。」とおっしゃいました。そこでグループの様子を見てみると、学生も研究者たちも Pyykkö 先生にいろいろな質問をしていました。科学のこと、フィンランドでの生活のこと、世界経済や、ジョークまで。先生は仕事の途中でもご自分の手を止めて真摯に彼らの質問に耳を傾け、それらの質問に明確にそして短く答えていらっしゃいました。そして先生ご自身がいつも勉強をいらっしゃいました。印象的だったのは「習うということに（年齢的に）遅いということはないと思っています。あなたは何を知っているのですか？ 私に教えてください。」とおっしゃったときです。学問へのあくなき探究心、大教授でありながら教えるを請う姿に、もしも研究を続けられるならばこうありたいと先生の背中を見て思いました。

私はヘルシンキ大学で化学結合の距離を決定し、周期表全体から、原子はどのような情報を持つのかということの研究をしていました。専門的に言うと共有結合半径を決定する研究をしていました。人の体も、机も、空気も、すべてのものは原子という小さな存在から出来ていて、原子と原子がつながって分子というものになり、私たちの目に見えるものを作っています。それらの形や特徴は原子と原子の長さによって変わってきます。私たちはこの原子と原子の間の距離を世の中にあるすべての元素について研究しました。物事のすべての基本となる研究に関わることが出来ました。このような研究は理学という分野に入ります。私の意見になりますが、理学というのは教科書に載るような研究分野だと思っています。世界中の学生や研究者の一つ一つの仕事が小さな流れだとしたら、それが集まって大きな潮流になり、教科書に載るほどの大仕事に結び付いていくものではないかと思

います。そこまで行くにはたとえ小さくともそれら一つ一つの研究の貢献が必要なのではないかと私は思います。100年前と今の教科書を比べるとどれだけの研究者が人々のよりよい幸せを願って日々研究をしてきたのかを感じ取ることが出来ます。

ご存じのように、このような研究の貢献にはノーベル賞というごほうびが与えられることがあります。ノーベル賞のうち物理学賞、化学賞はスウェーデン王立科学アカデミーで選考・決定されます。私は、ノルウェー王国研究審議会特別研究員としてオスロ大学で働いた後、The Swedish Instituteのご支援のもとで、現在は北欧最古の大学・スウェーデンのウプサラ大学で仕事をしています。ウプサラ大学では、先日のノーベル賞受賞の報道直後、王立科学アカデミーの委員の先生がなぜこの研究に賞を与えたのかを、コロキウムで発表してくださいました。多くの学生や教授たちが講堂に集まり、スライドごとにどこがいいのか、あの研究とどう違うのか、などを熱心に質問していました。その雰囲気には人々の学ぶことへの強い意欲を感じました。スウェーデンでは教養や学問ある人へ敬意を払うように思えます。

そしてスウェーデンで驚いたのは、現在名誉教授である先生のボスが女性の教授だということです。その女性の先生はもうお亡くなりになられていますが、もしいらしたら92歳になられます。このようにスウェーデンでは教養ある女性が昔から共学の大学の教壇に立ち、博士課程の学生指導をしていたのでしょう。そしてその当時の学生たちは今や教授や名誉教授となり世界的にも有名になっています。私もウプサラ大学にいて、女性が仕事場にいるのは当然だし、共学の中の女性リーダーとして育ててもらえること、そしてリーダーではあっても女性の権利を男性の同僚が分別を持って見守ってくれるところなどを、日々学んでいます。スウェーデンでは高校生の時に「よい夫（妻）になるための授業」というのがあると聞きました。それはスウェーデンのお菓子やパンを作ったり家事を習ったりする授業のようです。このように、学校教育の中によい夫になるための授業が取り入れられていることで、スウェーデン男性は女性の権利への分別も持つことが出来ているのではないかと思います。それと同時に、妻と夫は、ともに家事をし、助け合い、ともに社会を構成していこうということを自然と習うのではないかと思います。そして、先日、50年くらい前の研究所の先生方の写真の中に女性研究者がいないのを見た瞬間、若いスウェーデンの Lindh 先生が「女性研究者が一人もいないなんて、この時代のこの研究所の教授たちは恥を知るべき (Shame on you !)」とおっしゃったことには、はっとさせられました。女性の数を職場に増やすだけでなく、このような理解がある男性も増えてくれれば、女性・男性ともにもっとお互いを励ましあって輝いていけるのではないかと思います。他の北欧の国も常に女性が仕事場にいるのは当然になっていますし、それが法律で決められています。

ライフスタイルと言うのは時代や状況によって変わっていくもの。文化の違いと一言でまとめしまうよりも、なるほどな、と思えることは柔軟に受け入れ、よいところを少しずつ取り込んでいってもいいと思うのです。

北欧で、理学では一人ひとりの研究は価値があつてとても重要であることを再確認し、学んだことを生かせる仕事に就こうとすることで、女性が妻の時間や母の時間でもない研究者や仕事をする人としての自分だけの時間と生き方を毎日の時間の中に持つことができるということ、そうやって女性と男性が家族を作って助け合いお互いの視点から歩み寄ることができることの大切さを、私は学んでいます。



ウプサラ大聖堂



ウプサラ大学の研究所1階に展示されている Kai M. Siegbahn のノーベル賞。誰でも見ることができます。

湯浅年子記念特別研究員（2003年度）後のプロフィール

- 2003-2006 Double Degree at Ochanomizu University and Universite Louis Pasteur(France)
- 2006-2007 Academic Assitant at Ochanomizu University and Tokyo Woman's Christian University
- 2007-2009 Postdoctoral Scholar at University of Helsinki (Finland)
- 2009-2010 Postdoctoral Scholar at University of Oslo (Norway)
- 2010- Postdoctoral Scholar at Uppsala University (Sweden)